

連体修飾節におけるル形、タ形についての一考察
—学習者への提示の在り方について—

伊 藤 創*

**Consideration of the ru-form and ta-form of the
predicates in a noun-modifying clause.
—from a pedagogical point of view—**

Hajime Ito *

Abstract

In Japanese, the ru-form and ta-form of the predicates represent aspectual and temporal information. Using these forms correctly is very difficult for those learning Japanese. One of the reasons it is so difficult stems from the fact that the meaning of these two forms in subordinate clauses is very different from that when used in main clauses. The former is called “relative tense” , and the latter “absolute tense” .

While a lot of analyses have been carried out about this so far, most aim at explaining the system of the tense and aspect itself, but have not been done from a pedagogical point of view.

Considering the present situation, this paper seeks to find an effective way to make learners understand the aspectual and temporal meanings of ru-form and ta-form in subordinate clauses in addition to learning the correct usage of these forms by focusing on the noun-modifying clause.

Key words

relative tense, absolute tense, noun-modifying clause, ru-form, ta-form

1. はじめに

本稿は、日本語学習者が習得に困難を感じるとされる多くの文法項目のうち、名詞修飾節内のテンスについて考察するものである。

*いとう はじめ：大阪国際大学留学生別科非常勤講師（2010.9.30受理）

現代日本語の連体修飾節内の述部のル形、タ形は、テンス・アスペクト情報を表すことができるが、これらの形式は主節の述部に現れた場合とは異なる方式でテンス・アスペクト情報を表し、学習者を混乱させる。

主節末に現れる述語のル形・タ形は、(習慣や真理などを述べる場合は別として)基本的に、発話時を基準として<以前>なのか<以後>なのかを表すが、従属節におけるル形、タ形は、主節の事態を基準として<以前>なのか<以後>なのかを表す(場合がある)。

(1) a [洗った] 服は、すぐに乾燥機に入れてください。

b [洗う] 服だけ、横によけておいた。

(1a) は発話時点でまだ「洗う」という行為がなされていない状況で用いることができる(発話時点ですでに「洗う」という事態が成立した状況でも用いられるが)。つまり「洗った」という述語のタ形は、主節の事態、つまり「乾燥機に入れる」ときに、すでに洗ってあるということを表している。(1b) についても、従属節内では「洗う」というル形が用いられているが、これは発話時からみて「洗う」という行為が<以後>に行われるという意味ではない。つまり、これも「横によけておく」という主節の事態を行う時点からみて「洗う」という事態が<以後>であるという事象を表している。

このような、従属節の事態の時間的位置を捉える視点が主節の事態の時点にあるものは、「相対テンス」と呼ばれる(工藤1995)。しかし、従属節内のル形、タ形が必ずしもこの「相対テンス」を表すわけではない。以下の(2)の「自殺」が成立したのは、主節の「タクシーでそこへ行った」という事態よりも<以前>なのではなく、あくまで発話時から見て<以前>である(以下、他の文献からの引用例文にも全て名詞修飾節にあたる部分を [] で囲む)。

(2) [越前海岸で自殺した] 女性は、タクシーでそこへ行った(らしい)。

三原(1992: 16)を簡略化

このような発話時からみた<以前><以後>というテンス情報は、「絶対テンス」と呼ばれる。(1)(2)が示すように、従属節内のル形・タ形は、この「絶対テンス」「相対テンス」のいずれをも表しうるのである。

こうした「相対テンス」「絶対テンス」という観点から、従属節内の述語の形式に関する分析はこれまでも数多くなされているが、岩崎(1998)が指摘するように、それらのほとんどが既に出来上がっている文のル形、タ形が相対テンス、絶対テンスのいずれを表しているのか、という解釈的な観点からの分析であり、文を作り出す際にいずれのテンスを選択すべきか、という生産的な規則を提示するものは少ない。

そのような状況に鑑み、本稿では、日本語学習者への相対テンス、絶対テンスの効果的な教授方法を模索したい。そのためには、こういう場合には従属節の中はル形、こういう場合はタ形、という生産的な原理、そしてその原理にしたがった適切なル形、タ形の選択

を習得させる効果的な提示順などの考察が必要である。

勿論、これまでの数多くの分析にも拘わらず、相対、絶対テンスにはまだまだ解明されていない点が多い。そんな中で、両形式の使い分けについての教授法を考えるのは無謀かもしれない。しかし、既に多くの日本語学習者が存在しその数が増加し続ける状況に鑑みれば、改善の余地は多分に残すとしても、その方法論について考える事は必要な事ではないかと考える。

本稿ではそのような考えの元、不完全さを十分に踏まえた上で考察を行っていく。また、従属節内のル形、タ形の使い分けの問題というのは複文全般に関わるものであるが、本稿では複文の中でも、連体修飾節に考察の範囲を限定する（これは、本稿が相対テンス、絶対テンスという問題のみを考えるなら、まず連体修飾節においてその概念を学習者に導入するのが良い、と考えていることにもよる）。

2. 従来の分析から探る学習者の混乱の要因

2. 1. 現在の「相対テンス」導入の在り方

さて、連体修飾節内のル形、タ形の使い分けについて効果的な学習方法を模索する為に、これまでの先行研究で述べられてきた相対テンス、絶対テンスの分析について、出来るだけ生産的な、つまり学習者の文の生成という観点から見ていき、その問題点を考えていくことにする。その最初の段階として、学習者がどのように、相対テンスや絶対テンスという概念を教えられているのか、その過程を見たい。

連体修飾節に関しては、まず節内のル形、タ形が絶対テンスを表すものから導入されるのが通常であろう。つまり、以下のように、連体修飾節の中のテンスが、発話時から見て<以前>か<以後>か、という基準で選択されるものである。

- (3) a [あの眼鏡をかけている] 人は山田さんです。
- b [会議で意見をいった] 人は山田さんです。
- c [パーティできる] 服を見せてください。

(みんなの日本語初級 I 本冊 第22課 : 182)

そして、従属節の中のル形、タ形の選択が、このような発話時を基準とした絶対テンスではなく、主節の事態を基準とした相対テンスによって決まる（場合がある）という事実を最初に学習者が学ぶのは、連体修飾節ではなく、「～るとき」「～たとき」といった文型を学ぶ際ではないだろうか。

- (4) a うちへかえるとき、ケーキを買います。
- b うちへかえったとき、「ただいま」と言います。
- c 会社へくるとき、駅で部長に会いました。
- d 会社へきたとき、受付で社長に会いました。

(みんなの日本語初級 I 本冊 第23課 : 192)

その後、中級レベルになると、例えば、以下のように、相対テンスで解釈される連体修飾節が導入される¹。

- (5) a プレイガイドのまえは [切符を買う] 人たちの列ができていました。
 b [翌日出発する] 船の予約が取れました。
 c [この仕事でかせいだ] 金は、ヨットを買うために使いたいと思っています。
 (セルフマスターシリーズ2 : 78)
- (6) a 私は、[花子が見合いをする / した] 相手に電話をした。
 b [彼が書く / 書いた] 論文のテーマを明日きくつもりです。
 (テンス・アスペクト・ムード : 89)

2. 2. 相対テンス、絶対テンスの選択

このような二つのル形、タ形の使用の基準を学べば、まず学習者が疑問に思うのは、当然、どんな場合に修飾節内を相対テンスで（絶対テンスで）表現したらよいのか、という事であろう。例えば、先ほどの（5）の文を絶対テンスで表現してはならないのか、という事である。

- (5)' a # プレイガイドのまえは [切符を買った] 人たちの列ができていました。
 b ? [翌日出発した] 船の予約が取れました。
 c [この仕事でかせぐ] 金は、ヨットを買うために使いたいと思っています。

上の例は、相対テンスを絶対テンスに、つまり名詞修飾節内の事態を発話時基準で考え、ル形、タ形を入れ替えてみたものであるが、この場合、問題なく文が成立するのはcのみである。a、bについてはそのままでは不自然、あるいは解釈が変わってしまう。

但し、bについては、多少形を変えて以下のようにすれば、絶対テンスは可能であろう。

- (5)'' b [翌日出発した] 船の予約は、実は、出発の三日前に、ぎりぎりで取れた。

これらの例は、相対テンスを絶対テンスに変えようとしたものであるが、絶対テンスで表現されている文についても同様の現象が起こる。つまり、ある文は、相対、絶対テンスの入れ替えができて、あるときには入れ替えが効かないのである。

例えば、(2)のような従属節の述語が絶対テンスで描かれている文を、以下のように相対テンスに変えてみると非常に不自然な文ができあがってしまう。

- (2)' [越前海岸で自殺した] 女性は、タクシーでそこへ行った。
 ↓
 (2)''?? [越前海岸で自殺する] 女性は、タクシーでそこへ行った。

しかし、同様の構造で、以下のような文だと、相対テンスの文を作ることは可能である。

(6) a [試験を受けた] 学生は、バスでその試験会場へ向かった (らしい)。

↓

b [試験を受ける] 学生は、バスでその試験会場へ向かった。

この様に、学習者は、絶対テンスと相対テンスという二つの時制選択の基準があるという事を学ぶだけでは、どのような場合にどちらのテンスで表現するかに迷う事になる。同様に、理論的には可能なはずなのに、実際には片方が言えない例は多い。

(7) a 昨日 [激しい] 雨が降りました。

b *昨日 [激しかった] 雨が降りました。

(8) a [激しい] 雨が夕方やっと小降りになった。

b [激しかった] 雨夕方やっと小降りになった。

(寺村1984 : 201)

更にこのような、いつどのような場合に、相対テンス、絶対テンスのいずれを用いるべきか、という疑問は、当然、連体修飾節に限らず生じる。

(9) a [太郎は原稿を { *書いている / 書いていた }] から電話に出なかった。

b [彼は金が { *ある / あった }] から、子供を留学させた。

c 私は、[きれいな服を { *着ている / 着ていた }] から、タクシーに乗った。

(井上1976)

(10) a [太郎が {汗をかいている / かいていた}] ので、タオルを出して顔を拭いてやった。

b [ドアが {閉まっている / 閉まっていた}] ので入れなかった。

(岩崎1995 : 37²)

複文における相対テンス、絶対テンスの選択原理を如何に学習者に提示するか、については、(9) のような状態性の述語、そして (10) のような「から」や「ので」などの接続形式で結ばれたものについても当然考察せねばならないのであるが、本稿では、名詞修飾節、そしてできるだけ動的な一回性の強い述語に限って考察を進める。

さて、相対テンスか絶対テンスか、という非常に素朴な、しかし決定的な問題を解決する為に、相対テンス、絶対テンスという時制選択基準そのものについて、あるいは、そもそも、連体修飾節の中のル形、タ形がどういう情報を表しているのかを、もう一度、見なおす必要がある。そこで以下では、生産的な規則を打ち立てるべく、これまでの分析を整

理したい。

2. 3. 相対テンスには、いくつかの種類がある。

まず、相対テンス、絶対テンスという捉え方についてであるが、実は、相対テンスにはいくつか種類があることが以前から指摘されている。

これまでは、発話時を基準として<以前>なのか<以後>なのか、を表すものを絶対テンス、主節時を基準としてそこから<以前>なのか<以後>なのかを表すものを、相対テンスという想定で話を進めてきたが、以下の様な、発話時でも主節時でもない時点を基準として、ル形、タ形が選択されていると考えられるものが存在する。

- (11) a [アフリカに行く] 計画が去年やっと実現した。
 b [卒業して10年経ったら同窓会をする] 約束になっている。
 c [1年後に返すという] 話を真に受けていた。

(丹羽2001 : 58)

(11a) のル形は、計画が実現してからアフリカに行くという意味で用いられている訳ではない。その計画がたてられた時点が基準時となっており、それ以降ということでル形が用いられているのである。他の文も同様に、約束した時点、話が発せられて聞いた時点が、ル形、タ形を選択する基準時となっている。こうした連体修飾節のとする基準時を丹羽(2001)では、「主名詞時基準」と呼んでいる。

また橋本(1997)は、「前」「後」といった名詞が、接続詞的ではなく通常の名詞として主格や目的格に立つ以下のような連体修飾について、これらが、発話時基準でも主節時基準でもない事を指摘している。

- (12) a [彼が政権から去った] あとが心配だ。
 b あの男の [日本に来る] まえの経歴を調べてみた。

(橋本1997 : 51)

(12a) の「政権から去る」という出来事は、「心配である」という時点よりも前であるから、「去った」のタ形は主節時基準から来るものではないし、かといって発話時基準から来るのでもない。(12b) もル形に関しても同様である。橋本(1997)は、このような連体修飾節の中のル形、タ形を選択する基準を丹羽と同様の名称「主名詞時基準」という名で呼んでいる。

ここで重要なのは、相対テンスというのは、まるで主節時基準と等価なものとして捉えられる場合があるが、実際にはそうではないという事である。発話時以外の時点を基準として相対的に決まるものという意味で「相対テンス」なのであって、その中には、いくつかの基準時が存在するのである。

2. 4. 従属節を眺める視点の必要性

上記のような、ル形、タ形が、発話時基準か、主節時基準か、さらにその他の時点を基準とするのか、という分析に関する議論として興味深いのが樋口（2001）の指摘である。

樋口（2001）は、以下の（13）のように従属節が複数ある場合や、あるいは（14）のように、主節が省略されてしまう場合の従属節の時制形式を選択する基準時について、これらの文においても、主節に至るまで、従属節の事態が知覚したりイメージしたりできないというはずはなく、従属節を解釈していく段階でも事態を捉える何らかの視点が必要なはずだ、と指摘する。

(13) 仕事に出掛ける妻を見送った僕は、幼稚園に子供を迎えに行く前にスーパーで買物して、帰宅後料理に取りかかる前に、この日記を書いてい {る／た}。

(14) [この仕事が立派にできた] 君なら、{あれもできる／できたよ／…}。

(樋口2001：67-68)

そして樋口（2001）では、各節が表す事態ごとに眺める視点の位置があり、それを表す事こそが、ル形、タ形の本来の役割なのだと述べる。つまり「日本語の時制は、そもそも発話時や主節時といった特定の基準時を持つのではなく、事態との相対的な位置に視点を持ってくるもの」であると述べる。つまり、ル形は「事態の途中又は事態がこれから起きるという時点に、タ形は事態が終わったものとして見える時点に、認知主体の視点を導くマーカーの様なもの」のである。そして、実は日本語というのは、「事態を見ている視点の絶対的位置に関してはどちらかといえば無頓着」なのだと述べる（樋口2001：58-60）。

樋口（2001）の分析は、日本語の他の様々な現象をも説明しうる優れたものであり、本稿でもこのル形、タ形の担う情報についての考え方に基本的に賛同する。しかし、やはりこれまでの分析同様、解釈的な側面が強く、このままの形では、日本語学習者への教授を目的にした場合の解答を呈してくれるものではない。命題ごとにそれを眺める視点が変わる、その視点の位置をマークするのがル形、タ形であるとして、ではそれぞれの命題を眺める視点の位置が完全に自由か、ということそうではないからである。常に、様々な基準時を自由に選べるというのなら問題はないが、ある基準時を選択すると非文法的、あるいは異なった意味を表してしまうという事実がある以上、事態を眺める視点の位置を決める原理、というものを学習者に明示的に、あるいは、暗示的にでも学習者に習得させる必要がある。

3. 本稿の解決試案

このように先行研究を学習者の立場に立って見れば、つまるところ、連体修飾節のル形、タ形を選択を行う際に、適切な基準時の設定ができるか否か、が重要である事が分かってくる。つまりは発話時を基準とするべきなのか、その他の時点を基準とするべきなのか（後述するが、つまりは事態を客観的に眺めるか、事態内に入り込むか）という事である。

この点に関しては、従来から学習が難しい事は指摘され、実際、この文法項目だけを学習者用にとりあげ、明示的に教授しようとするテキストも存在する。しかし、日本語や日本文学等を専攻とするような学生ならともかく、通常、こうした学習書に手を伸ばす学生は多くはあるまい。さらに、他の文法項目についても難しいものが多々ある中で、それぞれに多大な時間をかけて学習することも現実的には難しいと思われる。そこで本稿では、出来るだけ、テンスやアスペクトといった概念を用いず（つまりはこの文法項目だけを集中的に訓練するというやり方ではなく）通常の日本語学習の中に、どのような順で、どのような例文を導入していけば、より効果的に、連体修飾節の中の時制選択の基準時を適切に選べるようになるか、について考えていきたい。

3. 1. 相対テンスの導入

まず、名詞修飾節について、絶対テンスか、相対テンスのいずれから先に提示すべきか、については、本稿では、後者を先に提示するべきだと考える。さらに、述語としては、静的なものではなく、動的な動詞から導入するべきだと考える。例えば、以下の様なものがそれにあたる。

- (15) a [洗った／洗う] 服を横によけておいた。
 b [切った／切る] 魚を洗う。
- (16) a [線を引いた] 箇所をもう一度読んでください。
 b [線を引く] 箇所を先生が指示した。
- (17) a [捨てる] ゴミを玄関に出した。
 b [捨てた] ゴミに猫が集まっていた。
- (18) a [飲んだ] ジュースを捨てた。
 b [試合中に飲む] ジュース（を並べた）
- (19) a [買った] 本をきれいに並べよう。
 b [買う] 本を決めた。

これには二つの理由がある。一つには、まず連体修飾の典型的な役割は、名詞の属性を述べる事であり、その意味で「白い煙」や「重い本」といった名詞の見た目や本質を述べるような形で相対テンスを導入すれば、イメージとして捉えやすいのではないかと考えるからである。つまり、主文との時間関係からル形、タ形を選択する、という過程ではなく、モノの属性を表す部分として連体修飾節を捉えることで、例えば「切った魚」は「ばらばらの魚」として、一つの名詞単位で理解できるのである。勿論、これは、「V + N」という単純な構造で述べられるという学習項目として初期の段階で提示しやすいという利点も

ある。

二点目は、主節の時間的位置を踏まえて、それよりも以前か以後かを考え、従属節内の述語の形式を決めるという手順よりも、従属節の事態を頭に描いている時点でル形、タ形が選択され、最後に文全体を主節末のル形、タ形によって、時間軸上に位置づけるという方が、日本語母語話者のテンス、アスペクト形式の選択の実際にそっているのではないかと考えるからである。相対テンスによってル形、タ形を選択する際に、実際に我々が行っている認識活動は、その時点に入り込んで物事を眺める、という事である。その時点が過去であれ、未来であれ、それは関係なく、思い描いている事態の時点で、例えば、服が汚れていれば「洗う服」となるし、その時点できれいであれば「洗った服」と表現される。この描いた名詞のイメージとル形、タ形の選択が自動的になされる位に反復練習させる事が相対テンスを身につけさせる上で効果的なのではないだろうか。

これは樋口（2001）のいう、主節のテンスが確定する以前の段階でも、各節ごとに眺める視点が存在するはずだ、という考えに沿うものである。（15）～（19）のような完了、未完了のアスペクト的意味が強く出たル形、タ形を最初に導入することによって、連体修飾節（ひいては従属節一般）のル形、タ形が、発話時基準とは異なるという事を、まず初めに理解させる事が必要である（従属節内のル形、タ形と、主節末のル形、タ形が異なるものであるか否かについては従来から議論があるが、学習者にとってはそのような理論的な知識は必要ない。また、実際問題として、学習者には、この二つの場合で両形式は大きく性質が異なるものだという事を一旦は認識してもらったほうが学習は効率的であろう³⁾）。

上記のような連体修飾節だけで具体的にモノとしてイメージできるものを導入した後に、以下の様な例を出し、理解の確認を測ればなお良い。

- (20) a [帰国した] 友達に手紙を書こう。
b [帰国する] 友達に会った。
- (21) a [彼と会った] 事を秘密にしておこう。
b [彼と会う] 事を秘密にしておこう。

このような名詞単位でのイメージが可能な連体修飾を導入した後に、「～る前」「～た後」や「～るとき」「～たとき」の様な、時の従属節を導入すれば、さらに理解が定着するはずである。

3. 2. 絶対テンスの導入

上述のような相対テンスの用法を定着させた後、絶対テンスの導入を図るが、その際、名詞修飾節がタ形の場合、その名詞の持つ<履歴>を表すもの⁴⁾として理解を促すのが良いと思われる。これまでに導入された相対テンスのように、特定の時点での名詞のもつ

属性>を表すのとは少し種類が異なるものであり、主節の動詞と直接の時間関係を持たない事を理解させる事が重要であるからである。一方、ル形の場合、相対テンスであれ、絶対テンスであれ、(修飾節内の述部が表わす事態が未然なのであるから)名詞修飾節を名詞の属性としてはなかなかイメージしにくい為、構文的な観点からの指導が効果的ではないと考える(これについては後述)。

ル形、タ形、いずれにせよ、絶対テンスの導入には、まずは、コピュラ文を用いて、現在目の前にあるものについて説明をする、という状況が良いと思われる。発話時と主節時が同じであり、相対なのか絶対なのかを迷う必要がないこと、また主節にあたる部分に動的な述語が来ない、という点も相対テンスとの混乱を避ける意味でもよいと思われる。

- (22) a これは、[2年前に買った]車です。
 b それは、[明日、友達にあげる]プレゼントです。

導入としての留意点としては、名詞修飾節が、ある時点での状態とは異なり、それまでの<履歴>や今後の<予定>であるという事を示す、時点を表す語句(「明日」「1995年」「5年前」など)を必ず、名詞修飾節に入れることである。

特にタ形のものに関しては、このような文から導入を図ることにより、特定の時間における名詞の属性、あるいは状態を表すものとしての相対テンスと区別ができるはずである。

3. 3. 相対テンスと絶対テンスの選択

さて、(22)のような文のみを学んだ段階においては、相対テンスとの選択に悩む必要はないが、今後、主節に動的な述語が現れ、さらに絶対テンスでも名詞修飾節の中の述語が表現できることを知れば、学習者には、相対テンスを用いるべきなのか、絶対テンスを用いるのか、という疑問が生じることになる。

以下の文では、aでは発話時を基準としてル形、タ形が選択され、bでは、主節の時点を基準としてル形、タ形が選ばれている。

- (23) a [来週出席する]人は、再来週は休んでもいいです。
 b [来週出席した]人は、再来週は休んでもいいです。

(丹羽2001: 57)

- (24) a [試験を受けた]人は、皆、事前に申し込みをした。
 b [試験を受ける]人は、皆、事前に申し込みをした。

このように、相対、絶対テンスのいずれもが常に可能であれば、特に問題ないのであるが、実際には片方のみが可能である場合が少なくない。以下では、(23)のように、連体修飾節の表す事態(今後「P」と表記)のあとに、主節の事態(以後「Q」と表記)が生じ、且つ、両事態がともに発話時よりも以後の出来事を表すものと、(24)の様に、QのあとにPが生じ、且つ両事態が発話時以前である、という場合に分けて考察する(基本的に、従属節

の中が絶対テンス、相対テンスをともにとり得るのは、この二つのケースのみである⁵⁾。

3. 3. 1. 「P → Q」の順で、両事態が共に発話時以降の場合

まずは、(23) のような「P → Q」の順で事態が起こり、両事態が共に発話時以降の場合を考えてみたい。図1-aは、(23a) のような事態の捉え方を図示したものである。眼のイラストは、Pを眺める視点であり、発話時から事態を眺めていることを表している。発話時から見て<以後>の出来事であるために、「主席する」というル形が取られている絶対テンスの例である。一方、同様の事態を相対テンスで捉えた(23b)の文を図示したのが、図1-bである。この場合は、Pがタ形によって完了したものとして描かれており、それを示すために事態を眺める視点を過去向きにしてある。

図1-a

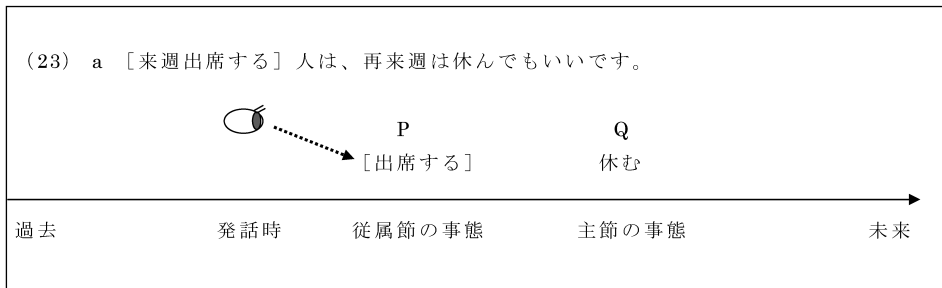
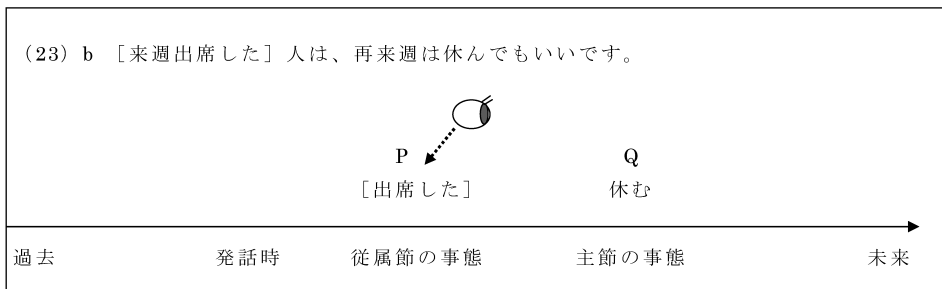


図1-b



このような二つの捉え方ができるために、連体修飾節の中がル形、タ形、共にとれるわけである。以下のような文も全て二つの捉え方が出来る例である。

- (25) a [次に {生まれる／生まれた}] 子には、ピアノを習わせたい。
 b [来週の説明会に {来た／来る} 人] にこのチラシを配ろう。
 c [明日そちらに {届く／届いた}] 書類に、サインして送り返して下さい。

しかし、先述のように、二つの事態が発話時以降に $P \rightarrow Q$ 順に並んでいれば、常に二つの視点の取り方が可能なわけではない。以下をご覧いただきたい。

相対テンスのみ可能なケース

- (26) a [明日の試験で {*通る／通った}] 人だけ、採用しよう。
 b [{*間違える／間違えた}] 箇所は、先生が徹底的に指導してくれる。
 c [明日、パチンコで {*かせぐ／かせいだ}] お金で飲みに行こうぜ。
 d [{*つれる／つれた}] 魚は、その場でさばいて食べよう。
 e [{*見つける／見つけた}] 宝は山分けだぞ？
 f [私の猫を {*探し出す／探し出した}] 人に、100万円差し上げます。
 g [次に {*出会う／出会った}] 人に、道を聞くことにしよう。
 h [次の試合で {*勝つ／勝った}] チームが決勝戦に出られる。

絶対テンスのみ可能なケース

- (27) a [4時頃に {来る／*来た}] 引っ越し屋さんに、これも運んでもらおう。
 b [今から {来る／*来た}] 私の友達と、一緒にご飯にいかない？
 c [2年後に {開催される／?開催された}] オリンピックに、彼も出場する。
 d [明日 {買う／*買った}] 車は、仕事で大活躍するはずだ。
 e [来月、のど自慢大会が {行われる／*行われた}] この公園で、来年は現代アートの展覧会が行われるらしい。

(26) は、連体修飾節内が相対テンスのタ形しか許されず、一方、(27) では絶対テンスのル形の使用しか許されない。

両者の違いは何であろうか。実は、この違いを考慮し、先に、絶対テンスの場合、名詞修飾節は<予定>を表す、という理解をさせるのが良いのではないかと提言したのであるが、(26) と (27) をよく観察してみると、前者では、P が発生するか不確定であるケースばかりである。したがって、P には、「間違える」「釣れる」「出会う」といった無意志動詞ばかりが用いられており、あるいは「かせぐ」という意思動詞であってもそれが「パチンコ」という不確定な手段によるものであったりする。

それに対し、(27) は全て、P が確定した<予定>なのである。P が確定した<予定>として認識されている場合に、P を絶対テンスのル形で描くことが出来るのである。

(26) のようなケースは、P が起こるか不確定であるから、P が起こった後の状態を想像し（つまりは、その時点に視点を移動させ）、Q を描く必要がある。したがって、事態の完了を強く示す必要があるのも、タ形が用いられるのではないだろうか。それに対して、(27) のように確実に P が起こることが分かっている場合には、P が完了した後、と強くイメージする必要はない。従ってル形で描けるものと思われる（動的な動詞の基本形は確定した未来の出来事を表す）。従って、P がル形をとる場合、名詞のもつ<予定>を表す

という意識がうまく定着していれば、相対テンスと迷う事は避けられるのではないだろうか。

3. 3. 2. 「Q → P」の順で、両事態が共に発話時以前の場合

学習者が、相対テンスを用いるか、絶対テンスを用いるべきか選択を迫られるもう一つのケースは、以下のようなQの後にPが起こり、かつP、Q共に発話時以前の場合である。

(24) a [試験を受けた]人は、皆、事前に申し込みをした。

b [試験を受ける]人は、皆、事前に申し込みをした。

(24a)の場合、P、Qともに発話時以前の事態であるために、Pは発話時基準（つまり絶対テンス）で、タ形が用いられている（図2-a）。一方（24b）は、図2-bの様に、Qの（申し込みをした）段階では、まだP（試験を受ける）を行っておらず、PはQの時点からみて<以後>であり、このことからPは相対テンスによってル形で描かれている。

図2-a

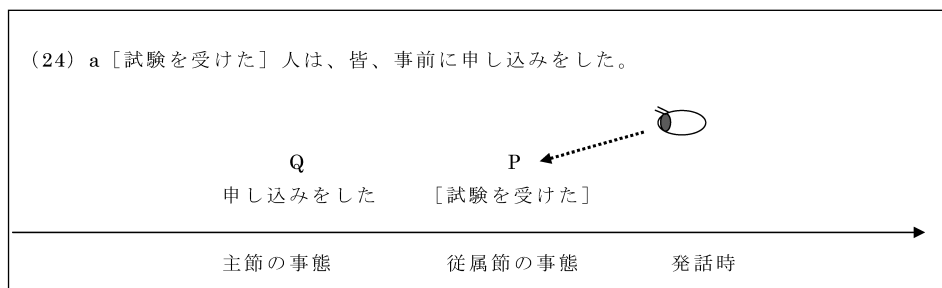
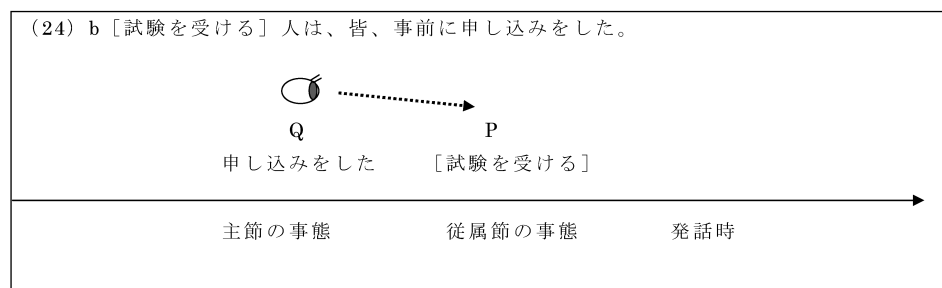


図2-b



さて、このような場合も、先の(26)(27)の時と同様、絶対テンス、相対テンス、のいずれかしか容認されないものがある。

相対テンスのみ可能なケース (Q → P の順を表すものとする)

- (28) a [決勝に {出る / # 出た}] メンバーが控室に集合した。
 b やっと [ボーナスで {買う / * 買った}] 車を決めた。
 c [プレゼンに {使う / # 使った}] 資料をもう一度チェックした。
 d [帰国 {する / # した}] 友達とお別れパーティをした。
 e [次の試合で {使う / # 使った}] ボールをよく磨いておいた。
 f [告白 {する / # した}] 相手を呼び出した。
 g [翌月、{打ち上げる / # 打ち上げた}] ロケットに不具合が見つかった。
 h [留学 {する / # した}] 学校から書類が届いた。

絶対テンスのみ可能なケース (Q → P の順を表すものとする)

- (29) a [去年 {* 売れる / 売れた}] この曲は、実は、私が作曲した。
 b [僕が先週 {* 買う / 買った}] 靴は、イタリアで作られた。
 c [九州に大きな被害を {* もたらす / もたらした}] 台風9号は、マレーシア近海で発生した。
 d [去年、ノーベル賞を {* 受賞する / 受賞した}] A 先生は、兵庫県の小さな農家に生まれた。
- (30) a [さっき初めて {* 会う / 会った}] 彼とは、実は前からメールでやりとりしていたんだ。
 b [去年 {* 行われる / 行われた}] コンサートに、私は出場しなかった。
 c [昨年 {* 廃校になる / 廃校になった}] この学校に、彼らは通っていた。
 d [火災で {* 燃えてしまう / 燃えてしまった}] この家の中に、3人の子供がいた。
 e [昨日 {* 捕まる / 捕まった}] A 社の課長は、以前から不正取引が囁かれていた。
 f [昨日、また {* 値上がりする / 値上がりした}] たばこは、以前は今の半額以下の値段だったよ。

P が相対テンスのタ形をとる場合には、特定の時点での状態 (e.g. 「焼いた魚」) としてイメージしやすいが、相対テンスのル形は、あくまでその名詞の今後の予定、を P が表すのみなので、一つの名詞の状態としてイメージするのは難しい。

そこで、P、Q ともに発話時以前の場合の、相対テンス、絶対テンスの使い分けの教授には、構文的な特徴を利用するのが効果的であると思われる。

特定の時点において P の表す事態が<未然>であるような名詞に対して、主節の述語によって何らかの操作を行うわけであるから、Pによって修飾される名詞が主節の述部と格関係にある場合、ほとんどが相対テンスをとると言って良い。一方、P が絶対テンスをとる場合というのはどういう場合かという、(29) のように、P という「履歴」を持つ

名詞を主題に立て、主節がそれについて説明を行うという場合か、(30)のように、P以前の状態をQが述べる場合である。

明示的、暗示的の別は問わず、このような絶対テンスをとる典型的な構文、相対テンスのそれをしっかり定着させる事ができれば、二つの基準時の選択に迷う機会を減少させる事が出来ると思われる。

4. 統語

以上、本稿では、複文におけるル形、タ形のこれまでの（特に主節と従属節での振る舞いや意味の違いについての）分析が、解釈的なものに限定されている事を踏まえ、こうした分析の成果を生かしつつ、日本語学習者がル形、タ形を自主的に使い分けられるような生産的な知識を持てるように指導する方法について模索した。

複文従属節の中のル形、タ形を、相対テンス、絶対テンスのいずれを基準として選択すべきなのかを名詞修飾節に限定して分析を行ったが、寺村（1984）も述べるように、「連体修飾をする動詞や形容詞におけるテンス、アスペクトの現われかたは、最も複雑で、きまりも微妙である（p19）」。それは、修飾節の中の述語が動的なものから静的なものまで幅広く、ル形、タ形が、動的な述語においてはアスペクト的側面を強く出し、形容詞など静的な述語におけるル形、タ形はテンス的な色を濃くするという違いや、修飾される名詞が実質的なものから形式的なものまで段階性があること（さらに、内の関係、外の関係の別もある）、あるいは修飾節の修飾の仕方、つまり制限的なものか、非制限的なものか、という違いなど、様々な要因が絡んでくるからである。

本稿では、その中で、典型的な名詞修飾（動的な一回性の強いものを述部にもつもの、内の関係、限定的修飾）を特に取り上げ、ル形、タ形を選択基準について、学習者への教授の在り方を考えてみた。冒頭でも述べたように、ル形、タ形、ひいてはテンス、アスペクト体系の分析がまだ、途上段階にある中で、このような考察は無謀に過ぎるものであるが、庵（2000）も指摘するように、これまでの日本語文法研究が、生産的な観点からみた原理原則の構築という観点からはなされていない、という事実を鑑み、不完全な形であるが、そのような観点からの分析を試みた。

今回の分析は、分析対象をかなり限定して行ったが、今後、先に述べたような多岐にわたる連体修飾節について包括的にテンス、アスペクト形式の教授法をさらに考察していきたい。

参考文献

- 橋本 修「相対基準時節の諸タイプ」、『国語学』181集、pp15-28、1995年。
樋口万里子「日本語の時制表現と事態認知視点」、『九州工業大学情報工学部紀要 人間科学篇』14、pp53-81、九州工業大学、2001年。
庵 功雄「教育文法に関する覚え書き—スコープの『のだ』を例として—」、『一橋大学留学生センター紀要』、第3号、2000年。（『岩崎 卓論文集』、2003年、付録。）
岩崎 卓「ノデ節、カラ節のテンスについて—従属節事態後続型のルノデ／ルカラー—」、『国語学』、179集、pp1-12、1994年。

- 「従属節のテンスと視点」、『現代日本語研究』第2号、pp67-84、1995年。（『岩崎 卓論文集』2003年、付録。）
- 金田一 春彦「国語動詞の一分類」、『日本語動詞のアスペクト』、pp5-61、むぎ書房、1976年。
- 工藤 真由美『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』、ひつじ書房、1995年。
- 三原 健一『時制解釈と統語現象』、くろしお出版、1992年。
- 三原 健一『日本語の統語構造』、松柏社、1994年。
- 丹羽 哲也「連体修飾節のテンスとアスペクト」、『言語』30、pp56-62、大修館書店、2001年。
- 尾上 治彦「日本語知覚補文テンスについての覚書き - 日英語の歴史的現在用法との関連において -
(1)」、『北海道武蔵女子短期大学紀要』32、pp25-51、北海道武蔵女子短期大学、2000年。
- 「日本語知覚補文テンスについての覚書き - 日英語の歴史的現在用法との関連において -
(2)」、『北海道武蔵女子短期大学紀要』33、pp1-33、北海道武蔵女子短期大学、2001年。
- 澤田治美『視点と主観性－日英語助動詞の分析』、ひつじ書房、1993年。
- 「日英語関係節のテンスと話し手の視点」、『英語青年』140-3、pp132-134、1994年。
- 「日本語知覚補文のテンスの解釈」、『日本語文法体系と方法』、ひつじ書房、pp23-37、1997年。
- 砂川 有里子『日本語文法セルフマスターシリーズ2 する・した・している』、くろしお出版、1986年。
- スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級』Ⅰ本冊、スリーエーネットワーク1998年。
- 『みんなの日本語初級』Ⅱ本冊、スリーエーネットワーク、1998年。
- 寺村秀夫『日本語のシンタックスと意味Ⅱ』、pp313-358、くろしお出版、1984年。
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター『初級 日本語』凡人社、1994年。

注

- ¹ このテキストで (5) の文が導入される際の説明は以下のようなものである。(P78)
修飾節の表すできごとが主文の表す時点でまだ実現していない（がいずれ実現する）ものであるようなときは、修飾節の述語は現在形を使う。このばあい、主文の述語は過去・現在・未来のどのときをあらわしていてもよい。
修飾節の表すできごとが主文の表す時点ですでに実現しているようなものであるようなときは、修飾節の述語は過去形を使う。このばあいも、主文の述語は過去・現在・未来のどのときをあらわしていてもよい。
- ² 岩崎の論文に関しては、年代に関しては初出年、ページ番号に関しては、それらの論文がまとめられてある岩崎卓論文集（2003）のページ番号に統一してある。
- ³ ル形、タ形については、アスペクトのみを表す、あるいはテンスのみ、という極端な立場ではなく、その表れる環境によって、強調される意味が異なるというのが、今の一般的な理解であろう。スルーシタの対立の根底にあるのは、＜以後－以前＞であろう。これは、終止の位置では、発話時を基準とする絶対的テンス対立となり、非終止の位置の継起タクシスの場合には、主文の出来事時を基準とする相対的テンス対立となる。そして、同時タクシスの場合には、＜運動内部の時間的限界への到達＞が＜以後か以前か＞というかたちで、アスペクト的対立を前面化させる。
(工藤1995: 225)
- ⁴ 履歴という考え方は丹羽（2001）に着想を得た。ただし、丹羽（2001）では、本稿のように、絶対テンスのタ形に限って「履歴」という用語を用いているのではなく、また未実現のことも「履歴」に含めており、名詞修飾節が表す広い意味での属性の一側面を捉えるために、この用語を用いている。
- ⁵ 例えば、以下の様な例でも P は絶対テンスで描かれているが、このような場合には、P の後に Q が起こるわけではないので、P が相対テンスでタ形をとることはない。
a [来年、開かれる] 国際会議は、実は日本が提唱した。
b [今日来る] 私の友達とは、二年前に知り合った。